

21

最初に、グループ8を見て、私は調べた情報をうのみにするのではなく、すべてに疑問を持ちながら取り組んでいることがすごいと感じた。

また三つ目のスライド10行目「もはや、大人だけが考え、伝達するだけでは、たりないのではないだろうか。」という言葉に教育現場でジェンダーを扱う必要性について説いており、その後の内容について支店が切り替えられる場面だったと感じた。

次に、私が9回目の課題に、教師が気を付けることとして発言、雰囲気作りだと取り上げた。またそれと同意として、5つ目のスライドに記されている通り、教師人の考えの押し付けにならないようにという留意点は私も賛成である。次に私が思いつかなかった部分は、「差別」と「区別」の境界線について適宜考える必要がある。(同スライド3行目)という文章である。私は発言、雰囲気作りをただ注意点として考えその境界線を記すことができていなかった。

そして、私は「差別」と「区別」の境界線を生得的な性の違いで分けることを区別だと考える。例えば、トイレに男女の区別がなくなることでは何が起きるかを考えてみるとどうだろうか。2020年9月に国際基督教大学オールジェンダートイレが設置されたことの反応などを一部抜粋すると「私は、現状の男女別トイレを使いづらいつ感じるセクシュアルマイノリティの人々にとって、オールジェンダートイレは必要なものだとして理解をしているつもりでした。一方で、(心と体の性が一致している)シスジェンダーの私は、女性として女性用トイレを使うことが当たり前だとも思っていました。実際に自分がオールジェンダートイレを使うと思うと、やはりなんだか不安を感じ、落ち着かない気分になります。」つまり、区別をなくしてしまうとそれについての不安感などが現れることがわかる。

一方、スライド24最終目標として、「男女間での区別があることが、生きづらさを作る原因になっている可能性を考える」この考えもとても大切だが、私は区別がないことで生まれる問題にも着目し他方が良いと考えた。

最後に、ジェンダー教育を行うにあたって、しっかりと境界線を引くことが教師に必要なと考えた。そして自分と相手の気持ちを考えること、差別と区別を意識することを教師がしっかりと伝えなければ、誤解を生む可能性すらあるということが分かった。しかし一方的な押し付けになってはならないという何とも制約の多く難しい教材だと感じた。

参考

トイレに“男女”の区別がなくなったら？国際基督教大学にできた「オールジェンダートイレ」を使ってわかったこと

<https://www.buzzfeed.com/jp/erinakamura1/allgend>

22

総合的な学習の時間に関して同じ世代の方の考える教育内容や方法についてみると、テーマ設定の背景からまとめまで細かくまとめられていて非常に感心した。

総合的な学習は伝えかたや表現の仕方次第で児童に影響の差が出てしまうと感じます。そのため、教師側が授業のプログラムを入念に設定することや授業構成を緻密に考えていくことが非常に重要なことだとわかりました。話し合いの内容など展開の仕方をあらかじめ考えておくことでスムーズに進めていけると感じました。

社会の問題や授業内で扱うプロジェクトについて児童の生活と重ねて考えさせることで、自分たちとどのような関りがあるのかについて自主的に考えることができ、またグループで自分たちの意見をほかの人の意見と重ね合わせることで相乗効果が生まれ良い授業構成になっていくのだと学ぶことができたので、自分たちが模擬授業をする際に意識していきたいです。

2 3

今現在の教育においてジェンダー教育は大切なことだと思いました。

私の地元の学校では制服を男女問わずその人が着たい制服を着ている学校があったりとジェンダーの人を考慮した学校が増えてきていると感じていて、今このように工夫している学校があることを知って、よりジェンダー教育は必要なものになっていると思います。またジェンダー教育はその人時代に沿って常識も変わってくるということがわかりました。この資料を見て、少しずつジェンダー教育が常識になっていくと思いました。今後どのような教育をするのか気になりました。

2 4

今回の「総合的な学習の時間」のグループ作品を見て感じたことは、身近なテーマを取り上げることで、自分たちも社会の一員であるという意識を持つことができるのではないかと感じるように感じた。

また、主体的に取り組むことで社会に対する問題意識を持ち、それを対話的にコミュニケーション能力によって深い学びをすることで、考える力を身に付けられるだけでなく、対話的に行うことで視野を広げ、多角的に多面的に考察することで様々な視点から問題解決する社会でのスキルを身に付けることができると考える。

「総合的な学習の時間」は、社会における会議でのディスカッションをシミュレートできるように感じたため、社会で活躍するための良い訓練になるのではないかと考える。

2 5

「1G～8G」の作品を見て思ったことは、それぞれテーマに合った色を使っていて見やすくなっていると感じた。

例えば、G6の「女性の就労に関する変化について」では女性をテーマにしているため全

体的にピンクの色を使っている。何気ないところだが、細かいところが工夫されていて作品を作る参考になった。

また、文字で淡々と説明をしているだけでなく、沢山の絵や図などを使って作っているため、分かりやすく見やすい作品が多かった。

26

1G の貧困と偏差値に関する記述から私は、貧困による経済格差は学力に影響を及ぼし、進学率にも影響を及ぼすと考える。

大学受験は高校受験以上にシビアであり、試験の良し悪しが顕著に進学の可否に大きく影響する。そのため、教育格差の影響を受けて育った子どもたちが大学進学できる可能性も少なくなるだろう。

仮に大学に合格し進学できたとしても、今度は経済的な問題が立ち上がるケースが考えられる。大学進学では入学金や授業料、教材代など様々な費用が必要になる。国立の大学でも標準額は入学金で約 30 万、授業料が 55 万円とされ、文科系学部と理系学部でも違いが生まれる。そして卒業までには約 250 万かかると言われ、私立大学はさらに高額になる。奨学金などの制度もあるが、これは借金という形で借りるものも多く、大学卒業後から返済しなければならないものが一般的である。この場合、負担として重くのしかかり、大学を卒業して、ある程度の給与を得られる企業に就職できたとしても、この奨学金を返済するために収入を充てるため、貧困状態に陥ることも考えられるのではないだろうか。

また、貧困は世代間で連鎖することも考えられる。親世代が貧困であれば子どもの生活にも影響を与える。特に成長過程での影響は大きく、身体だけでなく心にも影響を与えてしまう。貧困を理由に、子どもは教育や社会経験の機会を失ってしまい、結果として学力不足の子どもや精神的に未成熟なまま大人になり、低所得あるいは所得がない生活を送るケースが多くなり、貧困は連鎖してしまうのではないか。この連鎖が続けば続くほど子どもの貧困は深刻化すると考えられる。

27

まず、様々なグループの作品を見て気づいたことについて2つ述べていく。

1つ目は、情報の活用の上手さである。どのグループもグラフや写真を使うことで、相手に情報を上手く伝えることが出来ている。そして、その結果からわかったことをまとめることが出来ている。また、参考文献をみると様々なところから情報を引っ張ってきていることがわかる。自分たちの発表をより良くするためには、必要な情報を選び説得力のある発表が出来ていると思う。

2つ目は、話し合い活動についてである。グループで活動すればたくさんの意見が出る。けれども、船頭多くて船が山に登るようなことが起きないように、まとめる人だったり、相手の意見を尊重することが大切である。作品を作った感想に中心人物の存在が書いてある

が、その時の自分の役割を理解しながら活動することでグループの活動も円滑に進む。そして、調べたいテーマ、留意点、問題点など押さえない情報を明らかにして自分たちの目指すゴールを明確化できている。そのおかげで、多面的な視点から物事を捉えて、問題解決をすることが出来ている。

以上のことから、総合的な学習の時間は、グループで話し合っ意見をもとめる力や情報を集めて活用する力などたくさんの力を育てることができるということに改めて気づいた。これは、他の教科にも必要とされる力であるが、各教科の活動だけでは身につけることが難しい。近年、アクティブラーニングや ICT を活用した授業スタイルが取り入れられ、児童が身に付けなければいけない力も増えている。その時に活動を充実させるために総合的な学習の時間は重要な活動になるのではないだろうか。今回、たくさんの作品を見ることでそのことに気づくことが出来た。

総合的な学習の時間な学習の時間を他の教科の代替の時間に当てる教員も多いが、どのような役割があるのかを理解していればそんなことは出来ないのではないかと思った。

28

私は防災対策についてのスライドで総合的な学習の時間について学んだことがある。総合的な学習の時間では身の回りにある問題について自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質、能力を育てることをねらいとしている。

今回の防災対策は身の回りの問題で自然災害が多い今の世の中とても大切なことであると思う。このスライドでは、課題を見つけるためにまず自分の体験（地域ごと）から防災教育について考えている。その要因について、自ら考え、課題解決には個人の防災への関心が必要という結論へと導いている。これは総合的な学習の時間のねらいに沿っていると思った。さらにこのスライドを見ていくと、アンケートを取り、アンケート結果を踏まえてよりよい根拠のある答えを示している。

防災については個人だけでできるものではない。私自身もマンションに住んでおり、マンション全員で備えるべき事項もたくさんある。防災は自治体ごとの備えもある。そこで必要な時には積極的に地域の方へ訪ねてお話を伺ったり、地域のホームページを見たり地域とのかかわりも大切であると感じた。

総合的な学習の時間では自らの行動を見直したり振り返ったりしながら課題解決へ向け自ら考えることが大切であると思った。

29

私は、8つのグループのパワーポイントを見て、8Gの「ジェンダーと『女らしさ・男らしさ』の偏見を乗り越えるためには」について考えた。

8Gはジェンダー教育の最終目標の1つとして、「先天的性別差による機能差は少なからずある。これに準ずる制度やサポートは、差別には当たらない、区別である。（どこまでが必要なサポートなのかは慎重に考慮）」という項目を挙げている(p.24)。学校生活の中で「こ

れに準ずる制度やサポート」として考えられるのが男女別での体育の授業である。おそらく、年齢が上がるにつれて男女間での身体差が顕著に表れることや接触を伴う活動があることから男女別で行うという制度・サポートが体育の授業において設けられるのだろう。勿論、体育を男女別で行うのは先天的性別差によるものであることから「区別」である。

しかし、生得的な性で区別されることに違和感を覚える生徒もいるだろう。高校生頃になると、ある程度自分自身が確立されるため、生得的な性での区別が苦痛にすら感じてしまう場合もあると考える。このように、必要な区別でも生徒（児童）を傷つけてしまう場合がある。

このような生徒への配慮としてまず思いつくのが、特例を認めることである。しかし、更衣やトイレ等では特例が認められないことから根本的な問題解決にはなっていない。また、生得的な性による区別に特例をつくることは、生得的な性と後天的な性を混同させてしまっているという問題点もある。

学校のように集団で生活する場では、生得的な性による区別は必要不可欠である。それと同時に生得的な性での区別が苦痛である人への配慮も必要である。しかし、学校における体育の例で示したように、生得的な性での区別が苦痛である人への配慮は単純なものではない。今回挙げた例に関して、私自身もこのような配慮をすべきだという答えを見出すことができなかった。そのため、大学の授業や実践などを通して、性別に関しての配慮について深く学びたいと考えた。

30

SDGs と私たちの関わりの 4 グループの作品を見て。

私もゼミの授業で SDGs を考える授業がありました。そこで、飢餓、貧困、食品ロスなどを調べて、分かったことなどが静岡大学の学生も考えることは同じことが分かった。特にこれらは一つ一つの共通することが多いから、関わりが大きく一つを解決すればいいわけではなく、すべてを解決しないとなくなってしまうものであることがよく分かった。

日本のことでなく、世界を見ていて、世界で行われている政策など取り組んでいくことでよくなる。日本でまだなじみがない政策でもやっていくことが大切だと思いました。そして図説を入れているのでわかりやすい。

今、私たち学生に何ができるのかをより考えるきっかけをくれるものでした。あと 8 年で 2030 年になってしまうが、私たちの些細な行動がいい環境を作るまた、悪い行動をすれば 8 年後には今と変わらないもしくは悪くなっていると普段の生活から、取り組む姿勢が大切ということが分かった。

総合の授業に取り組むにあたり、SDGs まず知ってもらうことから始め、世界と日本の違いを知ってもらうことでよりわかりやすい授業展開になると思うと私は考えました。